

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 19 日現在

機関番号：32614

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24730667

研究課題名(和文) 明治期から昭和初期の学校教育における子どもと教師の「修養」に関する歴史的研究

研究課題名(英文) A historical research on "Syu-yo" of children and teachers in school education from the Meiji period to the early part of the Showa period

研究代表者

齋藤 智哉 (Saito, Tomoya)

國學院大學・文学部・准教授

研究者番号：80570481

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、明治期から昭和初期の学校教育における子どもと教師の「修養」を、木下竹次、澤柳政太郎、蘆田恵之助の思想と実践に焦点を当てて、明らかにすることを目的とした。奈良女子大学附属小学校が所蔵する奈良女子高等師範学校時代の史料を収集したところ、当初の予想を遙かに上回る分量の史料を得ることができたため、計画通りに研究が進まなかった。しかし、研究計画では木下個人に焦点を当てた研究を進める予定であったが、奈良女高師附小開校時(眞田主事)から木下が主事を辞任するまでの長い時期を対象にして、学校としての「修養」の取り組みを明らかにする視座を得ることができた。

研究成果の概要(英文)：The aim of this research is to clarify "Syu-yo" of children and teachers in school education from the Meiji period to the early part of the Showa period focusing on Kinoshita Takeji, Sawayanagi Masataro, and Ashida Enosuke. I had collected historical materials which the Elementary School Attached to Nara Women's University. But these materials are more than I expect, so I was not able to end all this research. Instead of ending all this research, I could clarify the "Syu-yo" on that school from the opening school to the end of World War .

研究分野：教育史、教育方法学

キーワード：修養 教養 身体 姿勢

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究に関する研究動向及び位置づけ  
「修養」研究は、日本の伝統的な自己形成概念としての「修養」と、天皇制イデオロギーを浸透させる装置として機能する「修養」の二つに大別することができる。このような「修養」研究の現状を、瀬川大は「『修養』研究の現在」(『研究室紀要第31号』東京大学大学院教育学研究科教育学研究室、2005年)において簡潔に整理した。しかし、瀬川論文では、教育史における「修養」研究の動向は、殆ど扱われていない。このことは、教育史研究あるいは教育思想研究が、「修養」を正面から十分に取り上げてこなかったことを意味していると考えられる。なお、教育史における「修養」研究として最も多いものは、修養団や各地の青年団などに代表されるような、青年期に焦点を当てた学校外教育における自己形成概念としての「修養」であった。

「修養」研究全体では、筒井清忠(『日本型「教養」の運命』岩波現代文庫)や渡辺かよ子(『『修養』と『教養』の分離に関する考察-1930年代の教養書を中心に-』『教育学研究』第66巻第3号、1999年)などの研究が、重要な先行研究として存在している。しかし、両者の一連の研究は、いずれも「教養」研究の副産物として「修養」に光を当てているため、「修養」の様相を十分に解明し切れていないという限界を有している。また、王成は、「修養」は中村正直が cultivate に対して与えた翻訳語であることを指摘しているが、中村が訳語として採用した「修養」の意味そのものについては明らかにしていない(王成「近代日本における〈修養〉概念の成立」『日本研究29』2004年)。

近年の教育史研究では、和崎光太郎が「修養」の概念定義に取り組んでいる(「青年期自己形成概念としての〈修養〉論の誕生」『日本の教育史学50号』2007年、ならびに「世紀転換期における〈修養〉の変容」『教育史フォーラム(5)』2010年)。しかし、和崎は青年期を分析対象として設定したことから、「〈修養〉概念は曖昧」であり「〈青年〉形成のための駆動装置」(和崎、2007)という、従来の教育史における「修養」研究と同様の結論に至っている。

①～③の背景と先行研究の知見を踏まえ、本研究では、本格的に取り上げられてこなかった学校教育の中での「修養」を、教育史研究の主題に据えることを試みる。すなわち、学校外教育でもなく、青年期を対象とするわけでもなく、「教養」研究の一環でもなく、学校教育を対象とした教育史研究として本格的に「修養」を主題化することの試みである。

(2) 研究動向を踏まえて着想に至った経緯と、それらから設定できる課題

「修養」はもはや死語になりつつあると言っても過言ではない。本務校で担当する教職課程の講義(教育の原理、約300名)で、学生に対して「修養という言葉を知っているか」と問いかけたところ、毎年数名(一桁)の学生しか知らない状況が続いている。このように教師を志す学生でさえも知らない「修養」という言葉は、2006年に改正された教育基本法の「教員」(第9条)において新たに登場した(「第9条 法律に定める学校の教員は、自己の崇高な使命を深く自覚し、絶えず研究と修養に励み、その職責の遂行に努めなければならない。2前項の教員については、その使命と職責の重要性にかんがみ、その身分は尊重され、待遇の適正が期せられるとともに、養成と研修の充実が図られなければならない。」)と。とりわけ、第9条第2項において、第1項の「研究と修養」が「研修」の語に集約されていることに注目したい。今後、専門職として教職の高度化を図り、教師の指導力向上の方法やシステムを考えるにあたって、「研修」はますます重要になってくる。ゆえに、より良い「研修」を構想し準備するためには、「修養」とはいかなるものであるかについて、概念の成立や意味の変遷に関する歴史的検討を精緻に行うことが必要になる。

本研究の着想を得た背景として示したと先行研究の状況を踏まえ、本研究を遂行する上で基底となる課題として明治初期に訳語として誕生した「修養」の概念定義を行うとともに、「修養」の多様な在り方に振り回されないために研究対象を限定することが必要となるだろう。したがって、本研究では、学校教育における「修養」に研究対象を限定し、そこで得られた知見と近代の「修養」思想における「修養」の意味を重ね合わせることを通して、最終的に「修養」の概念定義するための手がかりを得ることを目指す。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、明治期から昭和初期にかけて、学校教育における自律的学習の中心的方法であった「修養」の検討を通して、子どもと教師の自己形成の方法を歴史的に明らかにすることである。具体的には、木下竹次(1872～1946年)を中心として、澤柳政太郎(1865～1927年)、蘆田恵之助(1873～1951年)らを取り上げ、彼らの「修養」に関する思想と実践を個別に明らかにし、それぞれの共通点と差異に注目して整理を行い、歴史的・文化的・社会的な文脈において検討を行う。そして、最終的には、実態が不明確かつ多様な「修養」を俯瞰し整理するための座標軸を作成することを通して、子どもと教師の自己形成の方法としての「修養」を明らかにすることを目的とする。

### 3. 研究の方法

#### (1) 資史料の収集

##### 先行研究等

木下竹次・澤柳政太郎・蘆田恵之助に関して全集は既に入手しているが、雑誌論文や先行研究は全て収集しきれていない。木下竹次については、東京大学総合図書館ならびに同教育学部図書室、國學院大學図書館、奈良女子大学附属図書館、国立国会図書館等において収集を行う。澤柳政太郎については、東京大学総合図書館ならびに同教育学部図書室、國學院大學図書館、成城大学教育研究所、国立国会図書館等において収集を行う。蘆田恵之助については、木下・澤柳に準ずるが、新資料の発掘が難しい状況にあるため、関係者へのインタビューを行う必要が生じる可能性がある。

##### 資史料調査

本研究の中心に据えている木下竹次に関しては、奈良女子大学附属小学校史料室が所蔵・保管する『学校日誌』や『職員会記録』『教育功程』などの学校文書を閲覧し、デジタルカメラによって撮影する必要がある。また、必要に応じて業者に依頼して文字おこしを行って、デジタルデータとして研究の際の利便性を向上させる必要もでてくるだろう。

#### (2) 具体的な方法と手順

##### 基礎的作業 A

申請者が個別に遂行中である、中村正直における「修養」概念の研究を終了させることが、本研究の骨格を確固たるものにするために必要となってくる。中村正直がサミュエル・スマイルズの“Self-Help”を翻訳する際に culture と cultivation に対する訳語として「修養」を採用したことが、訳語としての「修養」の誕生であった。そこで、中村が翻訳の際に参考にしたロプシャイドの『英華辞典』と、明治期の日本国内で出版された国語辞書等に掲載されている「修養」の意味とを重ね合わせながら、明治初期から中期にかけての「修養」の意味の変遷を構造化しながら重層的に描き出したい。

##### 基礎的作業 B

修養思想全般に関して幅広く収集し検討を行う。具体的には、清澤満之をはじめとした浄土真宗の思想から、新渡戸稲造に代表されるようなキリスト教からの影響までを含め、修養思想全般を俯瞰できる視座を得ることを目指したい。

##### 木下竹次に関する史料収集と分析

奈良女子大学附属小学校史料室が保管する『学校日誌』『職員会記録』『教授要綱』『教授細目案』『教育功程』『学習指導要領』『学習研究会記録』等の学校文書の閲覧とデジタルカメラによる撮影を悉皆的に行う。3日間の調査を2回行う予定である(計6日間)。

史料収集終了後は速やかに分析作業に入りたい。具体的には、同校史料室で収集した史料と木下竹次の著作(雑誌論文含む)における「修養」「訓練」「訓育」「肚腰練成」など本研究におけるキーワードが使用されている箇所を全て抽出し、文脈上でそれぞれの意味を確定していく。また、木下竹次が奈良女高師附小の主事を務めた時期は長いことから、キーワードの使われ方や意味に変化があった場合は、時期区分を設定することも予定している。

##### 澤柳政太郎に関する資史料収集と分析

成城大学教育研究所が所蔵する澤柳政太郎私家文書や澤柳文庫の閲覧を行い、複写可能なものについては複写を行う。資史料収集が終わり次第、木下竹次に関する分析と同様に、「修養」が使用されている箇所を悉皆的に抽出した上で、文脈上において「修養」の意味を確定していく。とりわけ、澤柳の場合は、「学修」における「修養」の意味を確定させる予定である。

##### 蘆田恵之助に関する資史料収集と分析

蘆田に関しては新たな資史料が発見しにくい状況にあるため、既に入手してある『芦田恵之助国語教育全集』に加え、『同志同行』など図書館等で閲覧・入手できる全ての著作と雑誌論文、ならびに先行研究を悉皆的に収集する。資史料終了後は、と同様に、「修養」の使用箇所を悉皆的に抽出し、文脈上で「修養」の意味を確定する作業を行う。とりわけ、芦田の場合は、教師の「修養」に焦点を当てて分析を進めることにしたい。

### 4. 研究成果

#### (1) 奈良女子高等師範学校附属小学校における「修養」

研究計画に基づき、奈良女子大学附属小学校史料室で史料の閲覧を行い、デジタルカメラによる撮影を行った結果、当初の予想を遙かに超えて、奈良女高師附小開校時から終戦までのほぼ全ての史料を撮影することができた(約5000枚撮影)。また、本研究2年目の夏に、奈良女子大付属小副校長先生(当時)より、新資料として『伸びてゆく 木下竹次追悼号』の提供を受けることができた。このように、予想以上の資史料を獲得することができたことが、本研究にとって最大の成果であったと言える。しかし、予想以上の資料を得たことによって、研究計画が大幅に遅れてしまったことは、誤算であった。

奈良女高師附小開校時から『職員会記録』と『学校日誌』の検討を中心に進めていくうちに、初代主事を務めた眞田幸憲が、開校時から「姿勢」指導を行っていた事実を突き止めることができた。また、稀ではあるが、眞田は「姿勢」と「修養」を関連づけて児童に語っていることもある。眞田の「姿勢」指導の実態を明らかにする意義は次の通りであ

る。本研究で主たる対象としている木下竹次は、「自律的学習」の方法を「修養」に求めており、「姿勢」を根帯とした身体の構えづくりを重視していた。そのため、木下は学校内のいたるところで子どもに対して「腰を伸ばして」と声がけをしているし、教室には「腰を伸ばして」との掲示があつたりもする。木下主事時代の『職員会記録』と『学校日誌』の検討を進めると、木下は主事着任直後から「姿勢」に関して言及していたことが明らかになった。したがって、木下の「姿勢」指導は、眞田の「姿勢」指導を引き継いだものなのか、それとも木下のオリジナルな発想にもとづくものなのかを明らかにしないと、木下の「修養」をとらえきることが出来ないのである。

結論から言うと、眞田の「姿勢」指導は、木下の「姿勢」指導と全く異なるものであった。眞田は、奈良女高師附小開校当時の児童の多くが心身薄弱状態にあったことから、その改善方法として「気ヲ着ケノ姿勢」を保つことを指導した。そして、徐々に「気ヲ着ケノ姿勢」が出来るようになると、「意気ヲ充実」させることで学習効率を向上させるための「姿勢」指導へと移っていった。また、眞田の教育思想に従えば、眞田の「姿勢」指導は訓育や訓練と密接に結びついていることが明らかになった。「意気ヲ充実」させることで「意志の陶冶」を目指した訓育の実践だったのである。

他方で、木下主事時代の『職員会記録』と『学校日誌』の検討を進めていくと、1920年代は「修養」の出現頻度が高いが、1930年代に入ると「修養」よりも「訓練」の出現頻度が上回ることが明らかになった。もちろん「訓練」は「修養」との関わりで使用されているものもあるが、今回の研究期間では十分に検討を行うことができなかった。先行研究では1930年代の奈良女高師附小における「訓練」を取り扱ったものはあるが、「訓練」を「修養」との関係で明らかにしたものではない。本研究終了後、速やかに論文化したい。

しかし、重要な発見もあった。『職員会記録』に記載されている「主事訓告」は木下が語った内容を教師が記録しているものだが、『日誌』の一部に朝会で木下が語った内容を子どもが記録しているものを発見することができた。これは、木下が語ったことを子どもがいかに受け止め、理解し、記録として残したかを示す非常に重要な資料となる。従来の研究では、回想録を中心にしか当時の様子を知ることしかできなかったため、この発見は、子どもの言葉に従う形で、従来とは異なる奈良女高師附小の学習法を描きうる可能性が高い。既に複数の該当箇所を突き止めているので、今後、丁寧に分析の作業を進めていくことにしたい。また、本研究を通して、眞田幸憲時代を検討することができたことは、木下・澤柳・芦田といった個人の「修養」思想の検討に終始することなく、結果として

奈良女子高等師範附属小学校という一つの学校における「修養」を探究することができ、本研究の課題であった「学校教育」に対象を限定した「修養」研究を遂行することを可能する極めて重要な発見であったと総括することができる。

## (2) その他

予想外の資史料の量と新資料の提供により、奈良女高師附小における木下の研究に大幅に時間を取られてしまった。また、奈良女高師附小を研究対象にしたことで、木下以外にも取り上げるべき同校の教師が数人いることが明らかになった。したがって、澤柳政太郎と蘆田恵之助の研究、「修養」思想全般に関する整理等は、資史料を悉皆的に収集できた段階に留まっている。これらの資料については、ほぼ全てを集め、整理を終える段階まで進んでいるので、分析と論文化を急ぎ進めていくことにしたい。一方で、中村正直が翻訳した「修養」については、明治初期の翻訳事情（翻訳に使用された辞書等）を詳らかに出来ていない部分も多く、資料収集から含めて今後の課題として残ってしまった。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

### 〔雑誌論文〕(計1件)

齋藤 智哉「奈良女子高等師範学校附属小学校における眞田幸憲の『姿勢』指導-『個性の訓練』による『意志の陶冶』を目指した訓育の実践-」、『國學院大學教育学研究室紀要』、査読有、第49号、2015、1-11

### 〔学会発表〕(計2件)

齋藤 智哉「奈良女子高等師範学校附属小学校の学習法における身体-『修養』・『姿勢』・『肚腰練成』」、日本教育方法学会第49回大会、2013年10月6日(日) 於 埼玉大学

齋藤 智哉「1930年代の木下竹次における『修養』」、日本教育方法学会第48回大会、2012年10月7日(日) 於 福井大学

### 〔図書〕(計0件)

### 〔その他〕

ホームページ等 準備中

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

齋藤 智哉 (Saito, Tomoya)  
國學院大學・文学部・准教授  
研究者番号：80570481